

吹田のまち歩き

行きつけの理髪店のご主人から、吹田(すいた)と豊中の歴史・まち歩き資料をもらった。せっかくなので、吹田のまち歩きに出かけた。

JR 吹田駅から長い商店街を通り、まず旧西尾家住宅(国重要文化財)に向かった。広い敷地をぐるりと回って表門にいくと、門は閉じられ貼り紙がしてあった。今年の6月18日の大阪北部地震により、瓦の落下や灯籠の倒壊などの被害があり、当面の間、臨時休館しているという。



残念であるが、しかたがない。早く開館できることを願うばかりだ。帰宅してから、『あるック吹田』で写真を見た。解説によると「西尾家は江戸時代に旧仙洞御料

(上皇の料地)の庄屋を務めていた旧家でした。主屋、離れ、茶室、庭園など、歴史・文化・格式を伝えるもので、近代和風建築として高い評価を受け、国の重要文化財に指定されました」と書かれていた。



旧西尾家住宅は次の機会にして、近所の人に道を尋ねて「浜屋敷」に向かった。案内リーフレットによる

、「浜屋敷は江戸時代吹田村の旧庄屋屋敷です。吹田市が寄贈を受け、歴史と文化のまちづくりに関わる文化活動や交流の場として活用するため、改修再整備して2003年6月、吹田歴史文化まちづくりセンターとして生まれ変わりました。2004年公募で選ばれた愛称「浜屋敷」は高浜町と南高浜町の「浜」に「お屋敷」を重ねたもので、やさしい響きで親しまれています。」

お屋敷では、ガイドボランティアの人に丁寧に案内してもらった。広い座敷、大阪で「へっつい」と呼ばれるかまどに注目した。重厚な造りの蔵は、今はギャラリー兼音楽室、吹田発展資料室として使われている。資料室で数分間の吹田歴史ビデオを視聴した。帰宅してから『すいた歴史散歩』吹田市教育委員会を開くと、映像にでてきた旧吹田の歴史が綴られていた。



「延暦4(785)年、三国川(神崎川)が淀川と接続され、京都と西国をつなぐ水路としての役割を担うようになると、旧吹田は交通の要衝として重要度が増しました。平安～鎌倉時代にかけては吹田荘、倉殿荘などの荘園が成立し、鎌倉時代には貴族の別荘が営まれ、江戸時代には淀川水運の要所として発展し、過書船株を持つ家もありました。明治時代には鉄道が敷かれたことなどによって水運は衰えはじめますが、それでも昭和初期まで吹田浜は回漕で賑わっていたといえます。」

(2019年10月9日)